新年の挨拶

OR学会に期待すること

日本オペレーションズ・リサーチ学会　副会長
筑波大学　教授　**猿渡　康文**

あけましておめでとうございます．本年も，日本オペレーションズ・リサーチ学会をよろしくお願いいたします．新年が学会員の皆様にとりまして実り多き一年となりますことを祈念し，一言ご挨拶申し上げます．

2024年の干支は「甲辰」（きのえたつ）です．「甲」は，十干（じっかん）の最初の文字で，物事の「はじまり」を象徴しています．また「辰（龍）」は十二支の中で唯一の空想上の生き物です．「龍が現れるとめでたいことが起こる」と伝えられています．転じて，辰年は，活力旺盛になって大きく成長し，これからの成長を形作っていく年，努力が実りやすい年といわれています．本学会も活動が活性化し飛躍する年となるよう，皆様方の学会活動への積極的なご参加ならびにご支援・ご協力をよろしくお願いいたします．

さて，筆者と学会との繋がりに触れつつ，筆者が期待する「日本オペレーションズ・リサーチ学会」について述べさせていただきたいと思います．

筆者は，本学会に入会して35年になります．大学院生だった入会した当時は，インターネットが普及し始める少し前でしたので，研究発表会やシンポジウムは最新の研究成果に直接触れることができる唯一無二の存在でした．加えて，自分の研究成果を発表し意見交換をし，研究を深める場として活用させていただき，本学会がもつ甘い蜜をたくさん享受させていただきました．各地で開催されたSSORでは，出会う機会など滅多にない著名な先生方や他大学の学生・大学院生と直接繋がり，気軽に議論ができ，さらに夜遅くまでお酒を飲むなど，濃厚な時間を過ごすことができました．そのような機会や環境を作ってくださった諸先輩方に感謝申し上げます．

大学に職を得る前後から，学会の運営の裏方仕事に関与させていただくようになりました．最初の取組は，本学会を基盤としてはいますが，非公式の研究グループCOSTAを立ち上げたことです．組合せ最適化に興味をもつ若手研究者・学生を大学の壁を越えて繋ぐことを目的としたもので，同世代の方々とともに運営しました．学会のマイページで確認すると，公式には，研究普及委員，庶務幹事，広報委員，機関誌編集委員など，たくさんの委員を担当したことになっています．現代と異なり，自分の時間を自由にやりくりできる柔軟な環境が大学にあったのだろうと思います．右も左もわからない筆者に勇気をもって声をかけてくださった委員長・委員のみなさまに感謝しています．たくさんのことを学ぶ素晴らしい機会だったからです．

いまでも鮮明に覚えていることの一つは，学会創立40周年記念事業として企画された「OR用語事典」の編集作業です．現在でも（規定上は）存在しているOR事典編集委員会の委員として，掲載する用語などの選定，執筆者の選定，執筆の依頼，原稿の校正から書籍化，さらにはオンラインコンテンツ化までの作業の一部を担当しました．膨大な作業に心が折れそうになったとき，編集委員長や編集をリードする先生方から的確なアドバイスや心遣いをいただき，リーダーのあるべき姿を見ることができました．学会創立60周年記念事業の一環で，沖縄・那覇市で開催した春季研究発表会の実行委員としての活動も楽しい思い出となっています．沖縄の地では初開催で，実行委員会も沖縄県内の学会員が少ないこともあって現地と関東地区（本部）の混成チームでした．特別講演の人選，講演依頼，懇親会での出しものなど，委員が自由にアイデアを出し合い，噴出する課題を解決しながら作り上げました．筆者を含めた若手？が提案する夢物語や無理難題を温かい目で見守り，実現に向けたアドバイスをしていただいた当時の会長や実行委員長の度量の広さに感激しました．泡盛にノックアウトされたこととともに，当時の活動の記憶は色あせることなく鮮明にいまも心に刻まれています．このよう

な経験は，筆者の貴重な財産となっていることは言うまでもありません．

広報理事，機関誌編集理事を経て，副会長となりました．「苦労は買ってでもせよ」と昭和一桁生まれの父から何度も聞かされたその影響なのか，昭和生まれの筆者は，「頼まれたことは基本的には断らない」，「受けた恩は必ずいつか返す」ことを心がけています．学会を俯瞰する立場になって，これまでに学会から受けた恩をお返ししなければと考えるようになりました．冒頭に書いた「学会の活動の活性化と飛躍を実現する」はその一つだと考えています．

そもそも，学会員の皆さんは，学会に何を期待されているのでしょうか．賛助会員の皆さんはどうでしょう．これから学会員や賛助会員になろうと考えている方々は，学会員とは異なる期待があるかもしれません．いくつかの辞書を調べましたが，その大半では，学会は研究成果の発表の場と位置づけられていました．研究発表会で発表する，論文としてまとめ論文誌に掲載する．ただし，本学会であれば，オペレーションズ・リサーチという特定の学問に興味関心をもつ研究者や実務家によって構成されていなければ意味をなしません．

The Operations Research Society of Japan．本学会はSociety（ソサエティ）と名乗っています．ソサエティとは何を意味するのでしょうか．ソサエティは明治時代に「社会」と日本語訳されました．その社会は，自然的であれ人為的であれ，人間が構成する集団生活の総称（精選版　日本国語大辞典より）として用いられています．Association（アソシエイション）は社会集団の類型の一つです．これは，一定の目的を果たすために，同じ関心をもった人びとが人為的・計画的に作った集団のこと（精選版　日本国語大辞典より）です．本学会は，定款において「オペレーションズ・リサーチの研究および応用を促進し，オペレーションズ・リサーチの進歩と発達を通じて，文化と産業の発展に寄与することを目的とする．」と謳っていますので，個人的には言葉遊びかもしれませんが，本学会はソサエティというよりもアソシエーションがしっくりくる組織だと思います．つまり，一定の目的を果たすための持続可能な活動が推進できるように，研究発表をするといった学会が準備したメニューを味わう立場とともに，メニューを準備する立場の両方を，すべての学会員が能動的に担うことが必要ではないかと思います．そのうえで，組織の構成員であることが自然であり，構成員でないことの理由が見つからない，いわゆるコミュニティとなることが大切だと考えます．賛助会員を含めて学会員の期待に柔軟に応えられる学会の在り方を追求していくこと，それが学会活動の活性化と飛躍に繋がると信じています．

本学会は，筆者にとって研究者としての最も重要な拠り所です．たくさんの仲間と出会い，仲間を作る場であり，自己研鑽を積む場です．本学会がこれまで以上の魅力的な学会として益々発展していくことを期待して，新年の挨拶を終わりにします．